

梅と電車と。

161 南陽工業高等学校 課題研究鉄道模型班

ピッ。

いつものように、改札を通る。

「まもなく、列車が参ります。

危ないですから、黄色い線の内側に下がってお待ちください。」

この音を聞くのも最後だと思うと、なんだか寂しい。

「おう、お疲れ。」

別の車両から乗ってきた友人に話しかけられる。

「お疲れ。早かったな。卒業。」

「ああ。つい最近入学した気がするんだけどなあ」

外に向いた視線の先に、赤色が映る。小さな橋の上、列車は行く。

3年間、俺たちを運んでくれた。へとへとになりながら乗り込んだあの時も。

叱られてへこんだあの時も。皆でバカやってた時も。いつもそばに列車がいてくれた。

なんだか、名残惜しいな。

「あ、梅。」

花が、咲いていた。これから散っていくのだろうか。

俺たちみたいに、みんな散らばって、離れ離れになっていくのだろうか。

「まもなく——終点。〇〇です。車内にお忘れ物をなさいませんかようご注意ください…」